

式子内親王の「もみもみ」の歌について

矢田 淑子

はじめに

式子内親王は、平安末期の争乱の時期に後白河院の皇女として生まれ、多感な少女時代から十数年間を斎院として過ごし、後には出家という特殊な環境で生涯を送った。歌合などにはほとんど出席せず、当時の歌壇とは一線を画していたようである。歌は藤原俊成に師事し、彼の歌論書『古来風体抄』は内親王に奉られたと推測されている。

『後鳥羽院御口伝』^(注1)は、後鳥羽院の隠岐遷幸の前夜(二二二二～二二二七)に執筆したとされるが、はっきりとした成立年次は不明である。この歌論書には式子内親王の歌人評として、「斎院は、殊にもみもみとあるやうに詠まれき」とある。『後鳥羽院御口伝』にはその他「もみもみ」と評されている歌人に俊頼と定家を上げている。和歌史上重要な歌人であり、また歌

論書を著わした両者の歌に比肩する高い評価が式子内親王の歌にされているのである。式子内親王と俊頼・定家の歌には「もみもみ」という評語を核とした共通のものがあると思われる。後鳥羽院が『後鳥羽院御口伝』を書かれたときの新古今の歌人達は、「もみもみ」の意味を充分に実感として理解していたと思う。それはどのようなものか探ってみたい。それが少しでもわかることで、式子内親王の歌のよみに新しい面が見えてくるのではないかと思われる。

一 「もみもみ」の説明・後代の用法

歌論の評語として「もみもみ」は『後鳥羽院御口伝』にみえるのが最初で、歌人評の中で俊頼の「歌の姿」として示されている。それをもとにして解明の手がかりを得ようと思う。俊頼

について、

後頼堪能の者なり。歌の姿二様によめり。うるはしくやさしき様も殊に多く見ゆ。又もみもみと、人はえ詠みおほせぬやうなる姿もあり。この一様、すなはち定家卿が庶幾する姿なり。

うかりける人をはつせの山おろしよはげしかれとは祈らぬ物を

この姿なり。

とある。「堪能」な歌人がその能力によつて詠みだされた「人はえ詠みおほせぬやうなる姿」が「もみもみ」なのである。

さて、「もみもみ」の評語については、従来いろいろな説明がされている。「美的内容としては「たけ」に对立し、表現方法としては流暢の反対とみるべきもの」(注2)、「深く案じ、心を優先させることによつて、表現面では接統の論理を超越し、屈折・深みのある歌となり、結果的には余人の詠むことのできない巧緻な風体の歌」(注3)、「心理の曲折を尽し、平面的でない歌」(注4)、「内部から盛りあがる抒情と、それを統御する技法とがうまく調和した姿」(注5)、「歌の内容と表現の、深く調和して詠まれているさまに言い、表現としての言葉の運用における心のつくし方、わざのきわめ方が非凡な場合」(注6)、「も

む」「もみにもむ」とは烈しく責める意であるが、『後鳥羽院御口伝』の場合も感情内容・姿・詞のいずれであれ、急迫して勢いのある趣をさす」(注7)などと説明されている。

後鳥羽院は、歌風を表すことばとして用いているようであるが、これらの説明にもみられるように、その内実は様々な要素を含んだものであると考えられている。それは表現方法や技巧にかかわり、また歌風に関するものにも考えられ、さらに歌の評価にかかわる問題も含まれていると思われる。ここでは、これらの説明を踏まえつつ、後鳥羽院が具体的に歌を例示した後頼の歌を中心に「もみもみ」の定義について考えていくが、その前に「もみもみ」の意味と『後鳥羽院御口伝』よりも後代の「もみもみ」の用法についてみておきたい。

「もみもみ」はその後、室町時代に入つて、二条良基の『近來風体』や、正徹の『正徹物語』に見られる。

「もみもみ」の意味をみると、『大言海』にはそのままではなすが、「もむ」は(揉・搓)、一、両手にて物を握み摩る。手にて擦りて柔かになす。二、錐の柄を両手にて摩り廻らして穿つ。三、擦り触れ押し合ふ。入り乱れてせり合フ。四、いらだつ。もだゆ。などの意味があり、軍記物に「揉みに揉うでせめいる」という類の表現が多く見られる。手をもむ、紙や革をもむ、な

どと使われるが、身をもむ、気をもむなどの用例もある。「もむ」にあてた漢字に「鑽」「碎心」などの語があるから歌を詠むときは、鑽を究め、心を碎いて構想を練り、表現を起伏に富んだ柔軟なものにすることなどの意味を含むであろう。『日本国語大辞典』には「もみもみ」は「和歌で、こまやかに修辭をくふうし、委曲を尽くして表現するさまを表す語。能楽の演技などについてもいう」とある。

能楽論では、「揉む」とは烈しく身を動かすことで、急の段や軍体の演じ方として説かれている。

一切の事に序破急あれば、(中略) 殊更、揚句急なれば、揉み寄せて、手数を入(れ)てすべし。『風姿花伝』

軍体の風姿、本説によるべき程に、(中略) けなげなる節懸りにて、揉み揉みとあるべし。『三道』

とあるように、クライマックスの急の段では急調にたたまかけ、技巧を凝らして演じる事を「もみもみ」といい、「軍体」のよゆうな生動に富むきびきびとした感じの「節懸り」についていつている。曲の速度、動作、演技など、盛り上がる時には十分に動き回り、動きとそれを制御する技とをうまく調和させる様をいうのであろう。

和歌と能とでは詠むことと演じることで、その内容や目的が

異なるから、その表現方法も異なつてくると思われるが、単なる技巧に走るのではなく、内部から盛り上つてくるものを技巧で調和させるとしているのは共通である。「もみもみ」の表現とは、技巧的であり変化起伏に富んでいても、全体としてうまくまとまり、芯の強いしなやかさで貫かれねばならないのである。

ここまで、先行研究の「もみもみ」の説明や意味・後代の「もみもみ」の使い方についてみてきた。今度は具体的に後鳥羽院があげた俊頼の歌から「もみもみ」とはどのような歌風、あるいは歌の評価を表すのか考えてみる。

二 俊頼の歌の「もみもみ」

俊頼の「もみもみ」について考えてみる。再びであるが、後鳥羽院の俊頼の評について引用すると

俊頼堪能の者なり。歌の姿二様によめり。うるはしくやさしき様も殊に多く見ゆ。又もみもみと、人はえ詠みおほせぬやうなる姿もあり。この一様、すなはち定家卿が庶幾する姿なり。

うかりける人をはつせの山おろしよはげしかれとは祈ら

ぬ物を

この姿なり。

この歌は、『千載集』(恋二・七〇八)の歌で、詞書は「権中納言俊忠家に恋十首歌よみ侍りける時、いのれどもあはざる恋といへる心をよめる」とある。

初句の「うかりける」は貫之の歌にみえる。

うかりけるふしをばすててしらいとの今くる人と思ひなき
なん

(拾遺・恋・八九九・つらゆき)

貫之の歌も、自分につれない人への想いである。しかし貫之の歌は俊頼の歌と違い、つれないと思えるふしは捨ててこれから今来る人のように思いなそうと、それほど複雑な歌ではない。

それに対して俊頼の歌は、「うかりける人」が靡くように「はつせ」の観音様にお参りして一生懸命祈ったが、初瀬の「山おろし」が「はげしく」吹くように、うかりける人はますますつれなくなってしまうた、こんなに事態になれとは「いのらぬもの」なのにと歎いている。「はつせ」は「初瀬」と「果つ」を掛け、「はげし」は「山おろし」の風の激しさと「相手のつれなさ」と掛けている。こんな事態になるとは「祈らなかつた」のにと逆接の表現である。詞と詞がもつそれぞれの意味や掛詞などが相乗し影響し合いその効果で、複雑な心情を表し、曲折的で起

伏に富んでおり、論理的ではないが詞に勢いがある。二句の「人をはつせの」は俊頼独自の詞で、単刀直入に「人をはつせの」、三句「山おろし」というだけで、事態を表現し場面展開のテンポは速く、歌に動きが感じられる。また恋しさを自然に喩え間接的で、全体として複雑な情趣を湛えており、巧緻である。

初瀬については、昔から靈験あらたかな長谷寺の観音が有名で、『蜻蛉日記』、『源氏物語』「玉鬘」「手習」の巻などにも登場する。また初瀬は隱國(隱口)と枕詞があるように三方を山で囲まれており、冬の風は特に激しく吹く。上句の「初瀬の山おろし」は下の「はげし」にかかり、冬枯れの山から「山おろし」が吹き下ろす厳しい冷たい風、そうした索漠とした風景を浮かび上がらせ、山おろしの激しさを自分につれない相手の冷淡さ・無情さとかさねている。

「山おろしよ」の「よ」のない写本(注)もあるが、字余りでも「よ」をおいたのは、下句に強く掛っていくようにした俊頼の強い思惟も感じられる。このように「うかりける」の歌をみると、掛詞・縁語・倒置法・逆説などさまざまな趣向や技巧を凝らし、一首を複雑と曲折と暗示でみたしながらそれらは渾然と一体化しているのである。

この歌を、定家は『近代秀歌』遣送本の中で

これは心ふかく言心まかせてまねぶともいひつづけがたく、まことにおよぶまじきすがた也。

と高く評価している。この歌は、創作の心が深く、詞と心が自在に融合し力強いものであり、表現だけを模倣しても及ばない姿であるとしたのである。俊頼の歌の分析、詠出方法と定家の評を上げたが、院はこのような風体の歌を「もみもみ」の歌としたのである。

藤平春男氏は、俊頼の活躍した十二世紀初頭を、和歌が独立して鑑賞にたえる個人の歌であることを求められるようになってきた時代としている。俊頼歌論について、「題に基づく新鮮な場面構想は創作過程において詞の続けかた」と共に「韻律の形成」と同時におしすすめられるべきだと論じている。また俊頼は和歌を一首全体の表現として捉えようとしており、「うかりける」の歌で見られるように、抒情を叙景に絡ませる方法や人事を自然に仮託して詠う方法が用いられ、縁語・掛詞がよく使われた^(註)と述べている。

後鳥羽院は、俊頼の父、経信のことも次のように述べている。

大納言経信、殊にたけもあり、うるはしくして、しかも心たくみに見ゆ。

とある。『後鳥羽院御口伝』の中で「うるはし」と表現された

歌人は、経信と、その子俊頼だけである。『後鳥羽院御口伝』では冒頭近く、歌の姿を「うるはしくたけある姿」と「やさしく艶なる姿」の二つの類型に分けている。「たけもあり、うるはし」と評される経信は前者で、古今的伝統になかった静的で直線的、清澄な叙景歌を詠んでいる。「うるはしくやさしき様」と評された俊頼の歌は、両方にまたがっており、端正と優美を兼ねる歌を詠んでいるとされている。後者の「やさしく艶なる姿」は、定家の歌であり、「もみもみ」という風体はこの類型に入ると思われる。

経信・俊頼が模索した新しい歌の萌芽は、確実に新古今時代到来を用意し、方向づけたのではなからうか。特に、俊頼は趣向、構想の珍しさ新しさへの追究、詞への強いこだわりなど、歌を案出する気構えが並々でなく、細やかで委曲を尽くした抒情の歌を作り、その中の「うかりける」の歌は、後鳥羽院のいう「人はえ詠みおほせぬやうなる姿」の歌であり、「もみもみ」といわれる歌である。

三 定家の歌の「もみもみ」

次は、定家の歌の「もみもみ」についての評をみる。後鳥羽

院は定家についてたくさんの評をしているが、「もみもみ」についての評は、

定家は、さうなき物なり。(中略) やさしくもみもみとあるやうに見ゆる姿、まことにありがたく見ゆ。道に達したるさまなど、殊勝なりき。(中略) 惣して彼の卿が歌の姿、殊勝の物なれども、人のまねふべきものにはあらず。心あるやうなるをば庶幾せず。ただ、詞・姿の艶にやさしきを本体とする間、その骨すぐれざらん初心の者まねばば、正体なき事になりぬべし。定家は生得の上手にてこそ、心何となけれども、うつくしくいひつづけたれば、殊勝の物にてあれ。

とあるように、『後鳥羽院御口伝』には、定家の歌について「やさしくもみもみとあるやうに見ゆる姿」「詞・姿の艶にやさしきを本体とする」「心何となけれども、うつくしくいひつづけたる姿」としている。

「定家は生得の上手にてこそ」「うつくしくいひつづけたれば、殊勝のものにてあれ」と筋の通つたものに貫かれていることは認めている。定家の歌に見られる詞・姿の艶にやさしい続け方は構想力や案出力の確かさを感じさせ、それは有機体のように詞やその続け方において密接な関係や統一をもち全体として艶

な雰囲気を醸しているのである。これは情調象徴ともいうことができる。

また、後鳥羽院は俊頼と定家の評に共に「やさし」という詞を用いている。「やさし」は院の生涯を貫く評語の中心的なものであるが、俊頼には「うるはしくやさしき様」と評し、定家の方には「詞・姿の艶にやさしきを本体とする」姿としている。俊頼の歌の「やさし」は心詞の均斉を表す「うるはし」と結びつき、定家のそれは「艶にやさしきを」とあざやかでつややかな色彩の「艶」と結びつけていることを示している。院は俊頼と定家の歌に「やさし」の微妙な使い分けをしており、異なった表情のある事を意識している。

次に定家の歌で、俊頼の「うかりける」の歌に発想の影響を受けたと思われる歌をあげ、後鳥羽院の「もみもみ」の評を参照して考えてみる。

としもへぬいのるちぎりははつせ山をのへのかねのよその
ゆふぐれ (新古今・恋二・二四二)

この歌は、建久四年(一一九三)秋、『六百番歌合』の歌で、定家三十二歳の時の作である。『新古今集』には「家に百首歌合し侍りけるに、祈恋といへる心を」とある。「祈恋」は「神仏に恋の成就を祈る」という意である。

初句から三句の「はつせ山」まで倒置を用い緊密な内容の詞である。また下句は、助詞「の」で名詞を繋ぎ韻律的效果もあり、複雑な内容を盛り込んで全体として屈折の多いものになっている。

俊成の判詞「風体は宜しく見え侍るを、心にこめて詞に確かならぬにや」と歌全体の心や体は好いとしている。それは上句と、下句の展開の妙を指していると思われる。しかし結句の「よそのゆふぐれ」を心はこもっているようだが詞が確かではないというのである。

そのことについて、藤平春男氏は、「上句における語句の倒置、第五句の表現などの晦渋さは、複雑な心情を場面とからませるためで、定家独特の表現である」^(注10)とのべている。初句の唐突さ、結句の晦渋さなど、若き定家が心を砕きながら推敲・案出した歌ということができよう。

新古今撰者の一人である有家も、同じ初瀬の鐘を詠っている。はつせ山いりあひのかねをきくたびに昔のとほくなるぞかなしき
(千載・雑・一一五四)

詞書に「太宰大式重家人道みまかりてのち、山寺懐旧といへる心をよめる」とある。有家の歌は、父を亡くした悲しみを長谷寺の入相の鐘に託して詠み、世の無常と時の経過などを聴覚的

な表現で詠っている。題に即した素朴で素直な歌であるが、初瀬の鐘を聞くという歌は昔から詠われている^(注11)。

一方定家の歌は、俊頼の歌、更にその頃平安貴族の間でさかに行われていた初瀬の観音詣を背景にしている。「源氏物語」「玉鬘」では、筑紫から上つてきた玉鬘が、初瀬にお参りして、源氏の所縁の人と出会う。「手習」では浮舟が入水を助けられ、尼僧の庵で過ごしていたが、尼僧が初瀬詣に行っているわずかな隙に出家するという話である。その他『万葉集』には妻問の歌^(注12)があり、初瀬は物語の世界や古歌を想起させる。定家の歌は構想力、案出力によりいっそう古典的世界の精妙な情趣を感じ取ることができるように用意されている。

これらをふまえて定家の歌の効果またその意図と「もみもみ」のことについても考えてみる。歌の意味は「私がお祈りすることともう幾年か過ぎました。しかし、その甲斐もなく、こうして初瀬山の峰の上の鐘の鳴る夕暮も、いたずらによその人の逢う夕暮で、私はただ歎いている」というのである。

石田吉貞氏は、「失恋の悲しみを歌う場面でも、物語の一場面のやうな美しい場面を設定して、そこに綿々たる恋の悲しみを歌いあげようとしている」^(注13)と述べている。

また、谷知子氏も「俊頼の歌の後日談のような一首で、俊頼

の歌では、冷淡ながらも、相手の存在があったが、定家の歌ではそれも完全に消え、一人で鐘の音を聞く人間の絶望だけが描かれている」^(注四)としている。俊頼と定家の二首の歌から叶わない恋の行方を、悲恋小説を読んでいるような、深刻で無情な現実を鋭く描き出している。

歌の効果を考えてきたが、定家の意図したものは「いのちぎり」「はつせ」「をのへのかね」「よそのゆふぐれ」などそれぞれの詞が持つ余情や風情を面影にしなげら、案出力や構想力により歌の周囲に奥深い情調を漂わせている。恋の祈りが未だ遂げられない夕暮の複雑に乱れる心を詠んで、連続たる調べの中に艶な雰囲気を十二分に表すことで「祈恋」の本意に迫っていると思われる。これは『後鳥羽院御口伝』にある「詞・姿の艶にやさしき」や「うつくしくいひつづけた」る歌ではないかと思われる。このような風体の歌を指して「もみもみ」の歌といったのではなからうか。

本歌である俊頼の歌と定家の歌の比較をすると、共に、曲折的であり、起伏に富み、巧緻・彫琢の趣があり、複雑な情趣を湛えている。相違するところは定家の歌の方が、濃やかな「やさしさ」「艶」などの情調を有していることである。

四 式子内親王の歌の「もみもみ」

次は式子内親王の歌をみる。後鳥羽院の式子内親王についての評を引用すると、

近き世になりては、大炊御門前齋院・故中御門の摂政・吉水前大僧正、これら殊勝なり。齋院は、殊にもみもみとあるやうに詠まれき。

とある。俊頼においては後鳥羽院・定家の評、定家においては後鳥羽院が多く紙面で評しているのと異なり、式子内親王の評はこれのみで簡単なものである。

参考にする直接の資料はないが、内親王の歌一首をあげる。

いきてよもあすまで人もつらからじこのゆふ暮をとばと
へかし (新古今・恋四・二二九九)

この歌は、『式子内親王集』には見られず、『新古今集』の詞書に、「百首歌中に」とある。散逸した百首歌の中にあつたのだろう。

また、この歌を考える参考として、和泉式部の歌をあげる。

けふしなばあすまでものおもはじとおもふにだにもかな
はぬぞうき (後拾遺・恋四・八二一・西宮前左大臣)

『後拾遺集』では西宮前左大臣(源高明)となつているが、

久保田淳氏は『新古今和歌集全評釈』で、正しくは和泉式部の作としている（注15）。和泉式部の歌も、今日にも恋死に思う歌である。式部の歌は、思うまいと思うのさえも叶わないことがつらいと堂々巡りのような歌で、恋の駆け引き、相手に對してポーズをとっている歌にも解される。

これに對して内親王の歌は、恋に想い焦がれ極限に追いつめられた女性が、訪う気持ちがあればこの夕暮に訪れて欲しいと一心に訴えている歌である。

小島吉雄氏は、内親王のこの歌に對して「よほど曲折に富んだ美しい調べ」で、「あすまで」は「いきてよも」を受け、同時に「つらからじ」を修飾しており「この語の続け方が非常に美しい曲折的表現をもたらず」（注16）と述べている。技巧がたんなる技巧に終わらず、強く通った抒情と相即不離の関係にあると思われる。

小島吉雄氏は、この歌の風体について述べているが、次の竹西寛子氏は表現の巧みさと心の深さを感じる歌としている。

言葉の振りが、多少なりとも作者の実感を上まわっていると感じる時、読者としてはその作品をつい白々しいと読んでしまふけれど、「生きてよも……」は、宣長もいうように、相当言葉に凝った歌だと思ふし、そればかりではなく、歌

の意味内容も自力の極限状態を示して辛いのに、少しも力みがなくて言葉の振りなど全く意識しないですむ。甲高い声を耳にする感じはなく、むしろ眩きに胸を衝かれる思いである（注17）。

筆者は次のように分析した。初句、二句は「も」の韻をふみ、三句は否定的推量の助動詞「じ」、結句は「とはばとへ」と命令形の表現で納めており、修辭や技巧を重ね、今まで想いつめていた激しい想いを表している。内向的、内省的であった心のつぶやきを詞にしたもので一首全体から感じられるのは小島吉雄氏の述べている「曲折的」というよりむしろ「曲線的」で、しなやかであり起伏に富んでいる。「とはばとへかし」と女性的なためらいの表現ではあるが、「あすまで」と期限を示しているので急迫している気持が表れており、歌に勢いがある。

また竹西寛子氏は、この歌は深い想いを表現する詞のつくし方が非常に巧みであるが、それをして作者の想いの実感に胸を衝かれるとしている。この歌は非常に技巧的であるにもかかわらず、強く通った抒情の方が勝っているとしているのである。筆者は抒情（心）が表現（詞）以上のもの（情調）を感じさせる歌ではないかと思う。後鳥羽院のいう「人はえ詠みおほせぬようなる姿」ではないだろうか。

この歌と俊頼の「うかりける」の歌を比較してみると共通するところは、曲線的で起伏に富んでいる。動的でしかも勢いがある。複雑な心情を詠って技巧的で巧緻の美しさがあるということである。

相違するところは、内親王の歌は俊頼の歌よりしなやかで洗練されている。起伏もやわらかく技巧も繊細で艶な情調がある。俊頼は恋しく思う心を間接的に表現しているが、内親王は直接的に心情を吐露している。この歌は「うかりける」の歌と類似するところがあり「もみもみ」の歌である可能性は高いと思われる。

ここで、式子内親王の歌の解釈について、一つの考えをみる。

後藤祥子氏の「女流による男歌―式子内親王歌への一視点―」

(注18)で、式子内親王は男性の恋歌を詠んでいたのではないかと述べている。「忍恋」の歌は通常男性が詠うものであるとし、例として「玉の緒よ」の歌をあげ、『源氏物語』「柏木」からの本説取りを指摘している。

では、この男歌と自ら体験した歌と「もみもみ」の関係はどのように考えたらいのだろうか。

内親王は前述のように、平安末期の争乱の時代に生き、決して平穏な生活ばかりではなかったと想像される。齋院時代のし

みじみとした抒情の歌は、まさしく体験から生まれた歌だと思われる。こうした体験の歌と思われる歌の他に、「玉の緒よ」や「いきてよも」のような激しい想いを詠った歌もある。それらの歌を以前は、内親王の体験として捉えられてきた。後藤祥子氏の論文は、内親王の歌の創作の過程を解き明かしたと思われる。しかし、『源氏物語』の柏木の心情に影響を受けての詠歌としても、自身の体験ではない恋をどうしてあのように心に迫る歌として詠むことができるのであろうか。このことに対して、阿部武彦氏は、内親王の恋の歌について次の様に述べている、

数多の憂苦を秘めた人生をうたうとき、その具体相として恋情を漂わせることが最も資質にも叶っていたと考えられるのではなからうか。(中略) 彼女の激情の調べは、人生上の憂苦が恋歌という形態をとって顕現されたものと考えられる方が妥当であると思われるのである。(注19)。

男性に仮託して詠んだ歌であろうと、物語に感動して詠んだ歌であろうと内親王の歌は、感情移入というフィルターを通して、深い抒情の中から詠まれたのではなからうか。そこには阿部氏のいう人生の憂苦が恋歌という形態をとって顕現されたものがあったと思われる。内親王は、物事を徹底して追求する人だと

思う。自分をつきつめ、恋をつきつめその本意を飽かずにつきつめるのである。その徹底した創作姿勢のさきに「いきてよ」の歌に見られたように、抒情と技巧が相即不離となり、内在律と呼ぶにふさわしい歌が生まれるのである。それが「もみもみ」という風体の歌を作るのかもしれない。

内親王の他の歌もみてみよう。

5 たまのをよたえなばたえねながらへばしのぶることのよ
わりもぞする（新古今・恋一・一〇三四、式子内親王集・

三二八）

6 わすれてはうちなげかるるゆふべかなわれのみしりてす
ぐる月日を（同・恋一・一〇三五、同・三一九）

7 我がこひはしる人もなしせくとこの涙もらすなつげのを
まくら（同・恋一・一〇三六、同・二七四）

『新古今集』の恋一の三連の歌を、次のように分析した。

5の歌は、忍恋の心情を堪えかねて、わが身に呼びかけている。三句以下は忍ぶことが極限になった感情のほとばしりを詠って、感情のうねりが切なく表現されている。しかしよく見ると押韻・疊句の手の込んだ技巧が隠されている。自分の想いをつきつめていった限界を詠った歎きである。曲線的で起伏に富み、激しい心情、複雑な情趣が漂っており、切実感がある。

6の歌は、歌の解釈としては四、五、一、二、三句の順に読み、文脈が複雑である。自分の心の中だけで想い過していた恋を忘れて恋人が来る（とされる）夕方になると待ち、来ないことを歎くという、現実の事と、心の中の事とを混同してしまふ瞬間の歌である。想いの深さとつきつめて想うという持続の長さを感じる。「われのみしりて」とひかえめな女性の品のよさが感じられ、艶な雰囲気も漂う。柔らかな起伏のある曲線的な歌である。

7の歌は、一・二句と、四・五句と二つの文章の間に「せくとこの」という詞で繋いで、奥の深い情趣のある歌になり、手の込んだ彫琢の趣といえる。「つげ」は「黄楊」と「告げ」を掛け、歌を複雑かつ重層にしている。「まくら」は恋の秘め事を知っているという認識があり、「とこ」「涙」「つげのをまくら」は女らしく美しい響きで艶な雰囲気がある。五句の「つげのをまくら」に向かって気持ちが高まり「もらすなつげのをまくら」と切実感があり、つきつめていくところがある。

これら三首の恋の歌に共通なものは、想いを持続させる力があり、深い抒情を持って詠んでいると考えられることである。それらは物事を徹底的に追及する基となっていたと思われる。内親王の「もみもみ」の歌は、内から自分を徹底して責めてい

く過程を通して生まれてくるのではなからうか。それは、俊頼の「うかりける」の歌と風体において多くの共通したところがある。

終わりに

最後に、三人の歌について述べてみる。

俊頼は、後鳥羽院に「もみもみ」と評された最初の人である。彼は和歌の刷新を願い、表現の重要性に着目し「詞」の役割を大切に、一首全体を内容的にも韻律的にも完成されたものにするべく腐心した。「うかりける」の歌は、激しい恋情を修辭に工夫し、委曲を尽くした抒情の歌であった。

定家は、後鳥羽院が評しているように「詞、姿の艶にやさしき」を旨とした。彼は題の本意を把握し表現における「詞・姿の艶にやさしき」の可能性を徹底的に模索した。そして「もみもみ」の歌といわれる定家独特の美の世界を作っている。それは創造力の力により対象を生かして、なまめかしく艶やかな情感を漂わす情調象徴の歌である。

内親王は、齋院、後に出家という特殊な環境で生涯を送った。内親王の歌は、対象を直観的に把握する鋭い感覚、繊細な感受

性、そして何ものにもゆるがない表現の強さなどを持っている。それらすべてが「もみもみ」の素地になっていると考えられる。たとえ題詠であっても、内からの必然的なものに深く根ざしている。魂の響きがそのまま歌となったような切実さが見られる。後鳥羽院は、内親王の「もみもみ」の歌の具体例を示していないが、内親王の徹底して追求するという創作姿勢の中に「もみもみ」の歌が生まれるのであろう。

三人に共通するものは、歌に心・詞のエネルギーが込められており「勢いがある趣」ということである。また「揉む」にあてた漢字「碎心」「鑽」の意のように、心を砕いて腐心し、求心的に「本意」に迫っていく姿勢も感じられる。三人の歌は、技巧的であってもそれを感じさせない境地にあるとも、盛り上がる抒情を統御する技巧の巧みさがあるともいえる。「もみもみ」の歌とは創作の心が深く、詞と心が自在に調和した融合しているもので、非凡な才能を持つ者だけに表現可能な歌の姿であると思われる。

注1 引用は、日本古典文学大系65『歌論集能楽論集』（岩波

書店、昭和三六年）に拠った。歌は、『新編国歌大観』（角川書店、昭和五八年）に拠り、『新編国歌大観』にない式

子内親王の歌は和歌文学大系23『式子内親王集』(明治書院、平成九年)に拠った。

- 2 日本古典文学大系65『歌論集能楽論集』所収、福田秀一氏の補注(岩波書店、昭和三十六年)
- 3 日本古典文学全集50『歌論集』所収、「歌論用語」の解説(小学館、昭和五〇年)
- 4 日本の古典11『和泉式部・西行・定家』所収、『後鳥羽院御口伝』久保田淳氏訳注(河出書房新社、昭和四七年)
- 5 赤羽淑『和歌大辞典』(明治書院、昭和六一年三月)
- 6 竹西寛子『日本の女歌』(日本放送出版協会、平成一〇年二月)
- 7 田中裕『和歌大辞典』(明治書院、昭和六一年三月)
- 8 「よ」の無い写本―『応永抄』『上条本古注』『異見』など、「よ」のある写本―『小倉色紙』『自筆本近代秀歌』為家本、堯考本、兼載本など。参考歌・今はみなおもひつくばの山おろしよしげきなげきとふきも伝へよ(拾遺愚草・中・一五六八)
- 9 藤平春男 藤平春男著作集 第三卷『歌論研究』(笠間書院、平成九年十二月)
- 10 藤平春男『日本名歌集成』(學燈社、昭和六三年十一月)
- 11 ゆふざりにこずるもみえずはつせ山いりあひのかねのおとばかりして(詞花集・秋・一一二・源兼昌)
- 12 澤瀉久孝『万葉集 卷第十三』(中央公論社、昭和三九年三月)
- 13 石田吉貞「式子内親王の原理」(學苑三〇一号、昭和四〇年一月)
- 14 谷知子「百人一首(全)」(角川文庫、平成二二年一月)
- 15 久保田淳『新古今和歌集全評釈 四』(角川学芸出版、昭和五一年十二月)
- 16 小島吉雄 古典日本文学全集 十二『古今和歌集新古今和歌集』(筑摩書房、昭和四〇年九月)
- 17 竹西寛子『式子内親王 永福門院』(講談社、平成五年一月)
- 18 後藤祥子『平安文学論集 女流による男歌―式子内親王歌への一視点―』(風間書房、平成四年一〇月)
- 19 阿部武彦「式子内親王試論」(日本文芸論稿五、昭和四九年二月)

(やだ としこ／一九六八年卒業)

キーワード＝式子内親王、もみもみ、後鳥羽院御口伝